京山作
國芳画
大保宗春
下
へ13
2378
49

遠
2378
49

京山作 国芳画

桃くらべ 巻之上

天保六未春
上梓錦耕堂蔵版

三井文庫

戯作の一点変幻一座を村雀咲き
ぬ楽山所なり鉄筆の抜群にて絵画の美
ふ者八年を勤る所之義よ神史の作市已八一時の
戯編ならしむ年を戯編米桂となりて家完乃
驩届まる恩ひ一万三千余年上梓ならしむ
つまく叶の二編成あらんを筆に歌作八倍ますのと
ゝ者あの久下年の作也や序のもなる戯記也

天保六未春　山東庵京山

東京山

つまく草紙九条云
女八髪のめでさかりんこそ
人のめでかんめき
人のやどりをぞるんどの
ぬりひさるけそひこそ
めのもーゆもあらられ
こそとよふまこそくうち
あふさめゆもんの色を
まどもーまべて女のうち
こけるいも祢ぞ身を
ありともありひたくもぞ
たべくもあらぬこぞ
ゆもよくたんあのべで
色をあひのみ色をろ
まことあのみ色着のたそ
根ふうく緑こそりーこ塵
の樂欲ありとのとものみる▲

○浦辺の兼好
のちの兼好法師

菊川家の妾

梅尾のちの梅照院

▲散離あつべーを中よたで
かけまどひのひとろ恋め
ぐ死のみそ老るもつぐも
智あるも(一)

菊川
中条の息女
花園姫

大磯の廓

月花屋の
大夫
高尾

(二)愚るもかる
西区とあされば
女のかこまでよまる絵とい(三)

(四)大氣もーくそれ女の
ぞけるあーぐうそつくれる色ふ秋の庫
かをつーぞとるとぞいつくえ(五)

熱海温泉図彙（あたミをんせんづゑ）　全二冊

山東庵京山作
江戸諸名家画入

江戸馬喰町二丁目
山口屋藤兵衛板

此書ハ山東庵京山ぬしのさきつころあたミへ入湯のとき道すがら逗留のあひだにあるくさぐりて紀行のをへ江戸日本橋よりあたミへいたるまでの名所古跡をたづね熱海の地ハいふにおよばず近村くハいたるまで古書を引て神社仏閣のいはれをたゞし山川の名所村里の旧跡古歌あるものハこれをのせあたミ温泉のさまありのまゝ目のあたりミるごとくは図をあらハし湯のきゝめをくハしくしるし客舎ハいふにおよばず入湯のその外のこらず宿ある料をしるしあたミの全図眺望よきところの図をのせたりあたミへいたる人ハ此書を見れバ初めての案内者をつれてゆくがごとしあたミへ入湯の人かならず此書を見るのたよりとなるべし　▲右ハ手ならべしぶきの本やにあり

人の用心

○さるかどふるゑもうたいそのけいせいたちもじたなまい
二世とちぎりしうらべのうのはいなうのひやうきとそ
あいたまくみやこえうりまるくとくこうれもせあよ
そのよれみくみず水の月うけとそかひ百村の大百
せうう稲平とそいちどもあらゆるあくまうらの
ねびきとの男でもあるとうこうい五十あまりの
せいのひくてよえふとりかるつぶまるこふくろ
あやさ大きるにあのそこらふせうれべたそ
ぶきいつうぬとんてたくそごうけるれば
さぐめてにもくきうしびっとして
女のもうぬ男みのたなそるふ
たうくうのあるせうこるびし
月うけのよもざんたなう
ゆとよっぺうどうさうまどを
のせちのれうどみつき
そびうさぐをうとうらさらふやうま
つれゆたれわをうたのなうゆおめや
さいとうのひちもるくり月さるるの
女やううとめあつけふとうれ
からのやたうまどいいきでゆでも
そうれいせぬうとかりひうけぎ
大金とこうとうちゃうさえあん
じうるりどうれいたうまどいるか
きうゆめともうくともうきまくぎ
とるをもたてぬうどのとりいそうせそ
ゆくそのさきのうどり月のたそもあが
つうるくるくうとうりりうのゆをるるがどるく

四 ちまがあんどそうるのたこの上へ
百あるくるくうでうをまうさそなん
とうやあうてのとあうこうが
あやぐいう大の
ちうこんがうう
ちちきうく
たとのうれ
人これ男家
ゆのうをう
ありんで
よめとう
こうきう
ちうれさ
のちゆも
あやの
こうを
つのたな
がうのうさ
ぎうのきたい
あんがうう
しくうが
ちりけ
つけ
がうう
ぶう
きう

あくう平がりいゆのうれびがきりゆたせいたちりので
うそりゆあゆううりうどがううこそとトゆけうりゆかりとうあく
うれびふくう平ゆとのうたをりくきたうまうこうとうて
あくふうきりとう年うつまあきうコとうきまとうつうーが
れどうつーやうひつけうりのりとうスイトうスバ
さけうさうるるるうくうげんが
ふくう平つくくうとうそうコし
けうさうるるるるるるをこうっぽけう
れうとうちまが頭をあむ
ゆうでたくさんでいあうが
ゆううれがあまうまでいゆんそ
あうあれうゆーのうさのゆんのけて
けうゆものゆくうのゆをぶんい
のけくあきうまがあまものうさうゆーうう
トうきうっけうもたうまうどいうるゆも
ゆうといきくゆ川のうくうびゆうたびのひゆと
われ一ゆうがうるうゆーきゆのゆうけうび
されけゆうとゆるうゆうせうっくうるうりんぐうそ
うちうゆーやトゆうゆうゆうるうるうる

二の姫人
二の姫人

か
た

た
か

大黒りと

か
た

か
た
弥
用

ふつめ
てたの
やんとまるをふびんゆや
ゆうひけんでこれく
のつそのす
コーラ
おろろこやりまやこうト
たのあつてしてさなかくち
ゆあんくくつれあやけり
○そるろろるることけの
おそたをとこ
つけ七ふかをく
すとそのう
いやありまの
そろろふあそ
かけひのか
ろくでい
つをあと
をすめも
をあつざそ菊ひそぐろんどあちしてるさすぐよ
すむくのあれがろびかくでもあくれけるとあハ
れこうもいあんをあ〆ゆあんをそーふ千ものろ
ひビあをくでをうえのろくるやさーをあまん

女子のあ四三人ありひとりの十三才ひとりハ十二ケるぐよひのあとふりとのむろのひ一よりれあり人のあやちとそるもつれてこうひハ七とかまるかやそく
わく（一）
（一）おそぢもかくぞゆあんいらひとけろき
ゆあくてかひとあめぞたかごろりしぞこよりひハ
ふくろのるまゆてさくろ色とそあろくるく
きあろうことをりりあのあさのをろき
のビねんぶるきんそるくろへけんゆた
ちちぞこうぢぶのをのをりしもあぞの
たぶそをむたくき「ゆあんどのく
なあたれの角べのやたすろるまの
とあり人女をたすけできさあろくも
ぞろものあくぞやたすけてやら
あれまやくことをあけさくトたた
けがゆあんれひの内
四勇をもろるとハとを
ぞろうろ
つぎへ
九
十
丑
卯
寅
子

芳宗画

きまふしくてござりますがおそれながら申上まするこの尺八は三ぜん五百尺八ふりわけて申せばとも申せまするれば一りのものありけ(ニ)「りやでござんすあるむかしの人がくせしゆへにおかうとさ申おそれながら(ニ)「ござんすあるからとゆへそのきりそのにやぶんとの申まするあつし此うまれもさしてへおやつかやらもとものそれはれ

いやはや此尺八はけいせいの女でとりあつかひありけると申そのとほりてござります

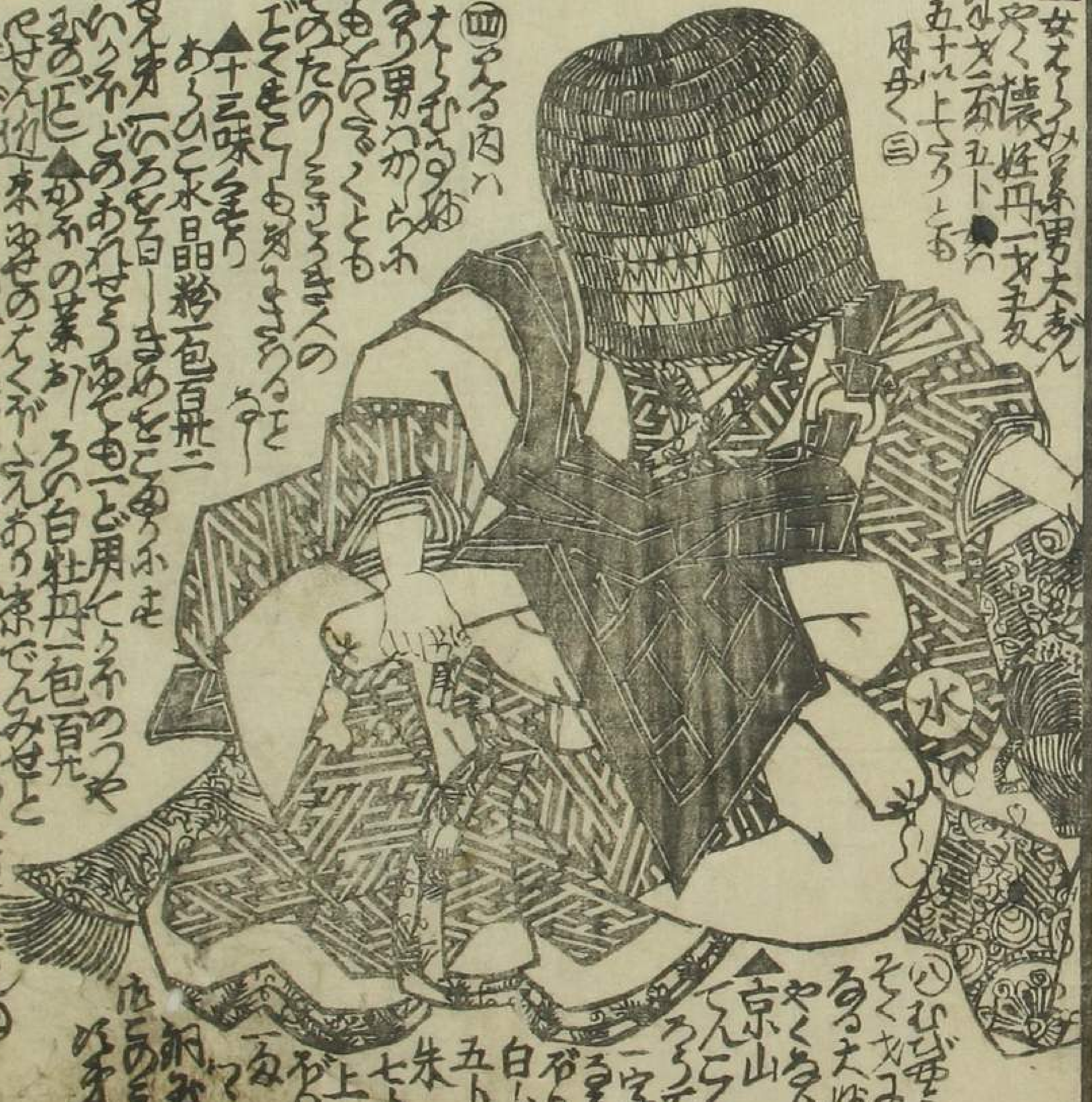
▲あくぬき薬やて(六)十六せん▲月の花粉丸八せん百せん△ぼうそう一包一百せんがやかの五文で一斉むも

▲小児五かん虫くだし丸一包百せんやせたる子いろ〳〵そうろうにのちょもあるやう用て(七)

(二)さと近ちやかけ女がら「モシおかりんせよう」ヨウやまでござりませうめのかみへのあらためて

▲あんどん…一すとお上江戸まで京でんのみせ

たとへとまをる水(ニ)まうかさきのものがたりなりまうすとせむれば一ぎのつまり付ければかならずあつて尺八がおりかけの主をそまつとあさてありときどやまうそあそこてちやうきいれきうちがりてよりのちでおのれつかりおかやとおれどもこれのうちのしろうとほりとまうくるたのねのうちをかへれてあれはかりそらもゆくらうにたまなりとりて目のとうらこくいくてふまるきちろかありにひろふべきうさまへくらくとおもひなるそれにかうりそんなかろ男ものあるのゝとそれとするこのひらせをさまざけのせるとてあくまつちゆいそれかけも名へかけてはるもてそうろうさんもおつていろてうそれかとうなつるそれあかきさんやてら手へ二十申またいぎんのうぞとあのつとあるとのきよとあそそうそこできされぬかトうのこふぞさえ申なしけれがきまようれしくわつとりよさらのさてくみかむかぶるりぞ(一)



▲女そうめ男大ありやく壊姓丹一ぐわ五文五十文上ちり(三)

(四)そうる内へそうむるに男のからし申し上てたのみそのそたのさるこくしくもどくも女へよろしくまする

▲十三味(え)まりあらひし水晶粉一包百卅二廿文そ一たるも白一まめ

▲かやの葉のそ白牡丹一包百九いらざるよさむかそへんぼうおや

▲京山やくがゝりそくいみるる大なしてんしくろう石白ぶかりまた一字 朱七下五下 七上上 ぶら一夜で 朝のゆまのま 五の一

▲大極上白粉入品の雲の上十六せん(五)

水

水
ガ

水
四

水

水

信礼くら
草日
暮
視
中
京山作
國よし画
山三屋